吾妻雄次郎先生に贈る

吾妻雄次郎先生の退職に寄せて

石　原　孝　哉

吾妻雄次郎先生が、平成11年３月をもって定年退職された。先生は外国語部の分離独立に際して中心的な役割を果たされたばかりでなく、その後も外国語部の重鎮として、教育、研究に献身してこられた。また、二度にわたって外国語部長を務められたほか、困難な時期の学生部長の重責も果たされ、本学の発展に多大な貢献をされた。

しかし、その後の外国語部は混乱を極め、いまだに学部自治を全うできていない。吾妻先生の時代に生まれた外国語部が先生のご退職とともに、存続の危機に瀕しているのを見るにつけても、今更のように先生あっての外国語部であったとの思いを強くしている。外国語部は今再生のための、いわば、産みの苦しみの中にあるが、必ずやこの試練を乗り越えて、新しく生まれ変わるであろう。

吾妻先生は長年吹奏楽部、サッカー部の部長として、課外活動の指導にも当たられた。先生がサッカー部長を辞められた後、松岡晋先生が後任のサッカー部長となり、私が副部長を引き受けることとなった。当時は、監督を学外から招いていたために、副部長をおいた方が運営がスムーズにゆくとの配慮からであった。私はサッカーについてはまったくの門外漢であったが、吾妻先生と一緒に試合を見ているうちにすっかりこの競技に魅せられてしまい、いつも試合が見られるならという軽い気持ちで引き受けることになったものである。

ところが、その後は勝利、勝利の連続で、とうとう関東選手権、総理大臣杯、東西対抗戦、全日本といったタイトルを総なめにし、リーグ戦優勝こそできなかったものの、王者の名を欲しいままにしてしまった。Ｊリーグのチームと直

接対決する天皇杯でも、いつも善戦し、プロの選手の心胆を寒からしめたほどであった。

おかげで私も、どっぷりとサッカーにはまり、今でも暇さえあればグラウンドに足を運んでいる。また、卒業後にプロに入った選手の試合を見たり、テレビ観戦するのも楽しみのひとつである。

私にサッカーの楽しさを教えてくれた吾妻先生に感謝するとともに、ときどきは一緒にグラウンドで観戦したいものと思っている。

この場をお借りして

岩崎　皇

「えっ、本当ですか」、定年と言われて、思わず聞き返してしまいましたが、考えてみれば、すでに何ヶ月か前に、先生からうかがっていたのです。おそらく、その時も同じように聞き返したと思います。先生はいつも溌剌とされていたので、ご様子から定年を連想する事が出来なかったのです。

物腰ばかりでなく、弁舌も実に流ちょうでした。駒沢の専任になったばかりの頃、議論の内容も分からぬ儘、教授会に出席していましたが、先生の淀みのない発言は強く印象に残りました。以来八年間が過ぎましたが、この印象に変化はありません。

「もう終わったの、どう、乗ってかない」、気軽に声を掛けていただくことが、しばしばありました。或いは親子ほど年が離れていたので、気安くしていただけたのかも知れませんが、家の方向が同じとはいえ、かえって恐縮してしまいました。

またある時、非常勤の女性の方と話をしていると、先生のお名前が出ました。「違う語学なのにどうして……」、聞けば、玉川校舎でご一緒するとの事。先生

が自らリンゴの皮を剥いて、その場の人にふるまわれた事など聞いて、改めて先生の気さくな人柄を感じました。

残念なのは、学内で催された退官記念の集まりに出席出来なかったことです。後で外国語部主催の会が当然あると思っていた私には、とりあえず記念品だけでもお送りするという今となっては、ご挨拶の機会は全くなくなってしまったようです。ですから、この場を借りて、先生に一言お礼を申し上げたいと思った次第です。

吾妻先生、いろいろとご親切にしていただきありがとうございました。いつまでも元気でご活躍下さい。

THE FOUNDING FATHER

岸　本　茂　和

ところで、吾妻先生、この夏はじめての山荘ぐらし、いかがでしたか。ロシア人の監督のもと、北欧の硬材をつかって仕上げた素敵なログハウス。栖みごこちもさこそと思われますが、家というものは、しかし、栖み馴れるには三年はかかるといいますから、しっくり身に適(あ)うには、もうすこし時間がかかるかもしれませんね。それにしても風雅を友に八ヶ岳山中の別墅に夏を避けておすごしであったとは、なんとも羨ましいかぎりです。

お便りを頂きながら、近況をおしらせすることもなく無沙汰をつづけていたさなか、先生のほうから、恙はなきやと問われるていたらく、かえって恐縮してしまいました。きけば先生は、村の温水プールで、酷暑に喘ぐ下界を尻目に、週に数度、あいかわらず、千メートル、千五百メートルの長距離を流しておられるとか……。そのうえ、山荘ぐらしを機に需めたと仄聞していた外国製のマウンテンバイクとやらで、山坂を遊弋しているときけば、もはや先生に、息災

にお過ごしですかなんぞと訊くのも野暮というもの。スポーツとか運動とかいうものにはさっぱりとして縁無き衆生のわたくしには、先生が古稀をすぎたお年とはとてもおもえない日常のようです。退職を機に家居をつづけ、なお、お元気であると聞くのは、わたくしども後進にとってはうれしいかぎりです。

この夏は、いつになく、油照りの毎日のように感じられ、炎暑といわんか溽暑といわんか、とにかく、わが軀、わが総身が、おまえもすでに還暦、われを扱うこと婦人のごとくせよと愬える声が、しみじみ身にしみて聞こえてきたほどでした。年少のころ、家の過去帳をなにとなく操ることがあって、何代にもわたって、家の男どもがみな六十前後で死んでいることに気づいたとき、そのころわたくしは長患いのさいちゅうで、二十歳まで生きられるなんて思いもしませんでしたが、それから四十年、ちかごろ、ふっと、そのときの数字が脳裏をよぎることがあり、すこしは身を慎まなければいけないかなぞと思うことのあるこのごろです。

さて、わが外国語部のことです。

ファカルティーは英米独仏中西露の六か国語を担当する外国語教員だけから成り、その専門分野は区々まちまち、外国語教員集団であることだけは共通しながらも、いわゆる語学文学あれば経済学があり、哲学あれば仏教学がある、思想史あれば比較文学がある、といったぐあいに、多士済々の気鋭が蝟集している。その教授会は学内にあっては独立した組織として存在しながら、学生を持たぬがゆえに、自由闊達の気風がみなぎり、どうじにまた、学生を持たぬがゆえに、いささか自己抑制に闕けるうらみ無しとしない、ともすれば岡目には夜郎自大のそしりを甘受しなければならない風もまま見られる。

そんな外国語部の創設に先生の力があずかっておおきかったことはたれしもの知るところ。ひそかにわたくしが先生を、外国語部の生みの親—“Founding Father”—と呼んでいたゆえんもそこにありました。思えばわたくしがそのファカルティーの一員になった二十数年まえ、先生は部長職に就いておられ、そのご四年あまり学生部長の要職をつとめられてからも、たしかもう一期二年間、ふたたび外国語部長をおやりになったはずです。学部長時代、教授会議長

として先生が、学内状況にたいするふかい理解と認識を背景に、カミソリのように鋭利な分析力によって、教授会に課された事項や問題をみごとに<腑分け>していったありさまが、ときには、生意気な新任教員に反撥をおぼえさせるほどであったことを、きっと先生は気がつかれていたにちがいありません。

さて、そのわが外国語部が創設されて三十有余年、それがいまどのような状況にあるか、先生もおおむねご存知のことと思います。外国語教員だけから成る外国語部というわれわれのユニークな組織体が、その歴史的使命を果たし終えて、いま、堂と、斃れようとしているのでしょうか。古い革袋を捨て去らなければならない時が来ているのかもしれません。あるいはあたらしい革袋にあたらしい外国語教育の理念と理想を注入しなければならない時がやってこようとしているのかもしれません。しかし、狂瀾を既到にめぐらすことはできぬと天を仰いで嗟嘆することだけは避けなければならない、秩序回復のため戦列をととのえ鈍刀(なまくら)ながらそれを振るわなければならない、と自戒をこめて思うこのごろです。

ところで、吾妻先生、とうとつでなんの脈絡もない話柄ですが、この夏、ずっと、むかし読んだ堀辰雄の文章のある一節が、憑きものようについて、わたくしから離れぬことがありました。

――「『Zweisamkeit!...』そんな独逸語が本当に何年ぶりかで私の口を衝いて出た。―孤独の淋しさ（アインザアムカイト）とはちがふ、が殆どそれと同種の、いはば差し向いの淋しさ（ツワイザアムカイト）と云ったやうなもの、そんなものだって此の人世にはあらうぢゃないか？」

Zweisamkeit――これはドイツ語には目に一丁字もないわたくしのいっとう好きなドイツ語のひとつ。手元の字引にあたってみると「差し向いの淋しさ」（なんという戦慄的な含意をもった美しい日本語！）が、「二人だけの水入らずの生活（状態）」となっている。断然わたくしは堀辰雄の訳解にくみするものですが、字引きの訳解もまんざらわるくもなさそうに思われてくる。

そこで、吾妻先生、いつかご馳走になったことのある二子玉川のドイツ料理店あたりで、天気のよい昼下がり、この“Zweisamkeit”について、お話できればと期待しています。なにしろわたくしのいちばん好きなドイツ語のひとつですし、訳解については堀辰雄派であることを旗幟鮮明にしているわけですから……。食後のうまい珈琲の店はわたくしに心当たりがありますのでご案内いたしましょう。

先走って言いそえれば、英語には、「差し向いの淋しさ」なぞという「此の人世にあらう」心的状態をあらわす含蓄のふかい語は、残念ながら見当たりません。

大学と吾妻先生の思い出

栗　原　万　修

吾妻先生とは学生時代からの知り合いなので、ずいぶん長い付き合いになる。最初から書きはじめたら一冊の本になるくらいかもしれない。それで、ここではまだ私たちが若いころの、それも駒沢大学が大きく変貌していった変革期のころに話を絞って、大学と吾妻先生の思い出を少し記したいと思う。今や多くの人たちが知らないであろう〈昔〉の話であるが、駒大にもそんな時代があったのかということを知ってもらうのも悪くないかもしれないと思うからである。

ところで私が２年間専任講師を勤めた仙台の大学から駒沢大学へ移ってきたのは、昭和41年、31歳のときであった。文学部所属だったが、当時、学内でもっとも若い教員の一人だった。その頃の駒沢大学は高度経済成長の波にのってどんどんと大きくなっていく途上にあった。

今から振り返ると、当時の駒沢大学は、大学の急成長に学内のいろいろな機

構や組織が追いつけず、多くの問題をかかえていた時代だったと思う。前近代的といってしまえばそれまでだが、学部教授会がない、研究室がない、留学規程がない、研究図書費がない、傷病規程がない、それどころか給与規程もないという、それこそ、ないないづくしの状態で、正直びっくりしたものである。前の大学では個人研究室があり、授業も週５コマないし６コマだったのが、駒大では一気に13コマになった。それも１クラス80名編成で、100名をこえるクラスが３クラスもあった。また個人研究室がなく、大学へいくと講師控室にカバンを置いて授業にいき、終わるとそのまま帰るという日常だった。教授会も委員会もなかったから、時間的な拘束もなく気楽といえば気楽だった。それに講師控室で他学部のいろいろな先生方と話ができるのも楽しみだった。実質的にも気分的にも、非常勤の教員のようであった。

その気楽な生活が一変したのは、学園紛争のためだった。大学当局が、一部の学生の学内で配布したビラを問題にして、配布した学生たちを停学処分にしたことから、一気に火がつき学園紛争に発展したのだった。当局は、それまで全学応援団という右寄りの学生組織を使って学内の民主化を押さえてきたが、もうそれでは押さえ切れなくなった。当時、全国に燎原の火のように広まっていった学園紛争の嵐は、本学にも無縁ではなかったのである。全学共闘会議が結成され、いわゆるノンポリ学生の多くも加わり、連日のように演説やデモが繰り返された。手の打ちようのなくなった当局は、度々教職員会議を招集し、その打開策を模索した。それを契機に、それまで何も言えず鬱積していた教職員の不満が噴出し、学内民主化への機運が高まっていった。各学部に、教授会に代わる〈専任教員会〉がつくられ、熱心な協議が繰り返された。学生対策と同時に、学内の民主化を推進するために全学的な〈刷新委員会〉という組織を新設することが決定され、各学部からそれぞれ数人の委員を選出して、大学の機構および組織の改革に乗り出したのである。そして文学部からは吾妻先生がその委員の一人として選ばれた。当時吾妻先生はまだ30歳後半の若さだったが、その弁舌の冴えは学内随一といっても過言ではなかったと思う。

実質的に教授会と同じ機能をはたしはじめた専任教員会は、度々夜遅くまで

会議を重ね、さまざまな学内の制度や組織を刷新、改革していった。吾妻先生を含む刷新委員会の人たちの活躍は大変なものだったし、教員会での議論も熱気をおびていた。多くの努力の後、学部教授会ができ、全学教授会が開かれ、各種委員会が設けられて、一般教員にもようやく公式な発言の場が確保されるようになった。

ところがその後、なぜ外国語担当の教員は全員文学部所属なのかという問題提起がなされ、度重なる討議の末に、全学部へ出講する外国語部として、文学部から分離独立することとなった。そして現在の外国語部が新しく設立されたわけである。(保健体育部も同じ)。

しかし、外国語部として独立しても、それは最初から平坦な道ではなかった。たとえば外国語部の長が、正式に〈部長〉と呼ばれるようになるにも長い時間を要した。そしてその最初の外国語部の正式の部長になったのは吾妻先生だった。ようやく外国語部教授会も他学部教授会と同じように機能しはじめたが、それには吾妻先生の、いわゆる政治力に負うところが大きかったかもしれない。また教授会の中に委員会をつくり、毎年のように当局と、持ちゴマや1クラスの受講生の人数について交渉することも可能となり、おかげで少しずつ他大学と同じようにノーマルな語学の授業ができるようになってきた。

けれども、刷新委員会や学部教授会、そして全学教授会、各種委員会等の努力によって、学内の組織や機構、教育面での改革はすすんだが ― 法人機構についてだけは手がつけられず、学長の公選等、法人機構の改革が実現されるのは、後に組合ができ10年ほどの歳月がすぎてからであった ― 教職員の待遇改善や身分保障に関しては相変わらず旧態依然としたものだった。給与についても、年毎に他大学との格差は広がっていくばかりだった。

それで、とうとう経済学部と外国語部が共同で給与委員会をつくり、当局と交渉をはじめた。その後、全学部が加わり全学給与委員会となって、各学部から2名の委員が出て給与の交渉をした。私も2年間給与委員をつとめたが、経済学部の古庄委員と一緒に私教連や法政大学の尾形ゼミなどへ行って資料をもらい、他大学との綿密な比較をやってみると、年収で半分ほどであることがわ

かった。都内の大学の中で下から２、３番目の低水準だったのである。わかりやすく図表やグラフにして給与委員会ニュースを発行した。その低賃金には当局自身も驚いたようだが、ともあれ一気に30パーセントほどのベースアップが実現した。

しかし、給与に関して一定の成果はあったものの、組合ではなく、給与委員会という名称からもわかるように、それ以外の傷病規定や留学規定など、身分保障や研究条件の改善などにはまったく手をつけられなかった。そして全力投球だった２年間の給与委員の役が終わって少しゆっくりしたいと思っていたとき、経済学部の若い人たちが並々ならぬ覚悟で組合づくりをはじめようとしているらしいというニュースが入ってきた。いくら組合が必要でも、一学部の人たちだけで組合をつくってもつぶされてしまうことは目に見えていた。一度つぶされたら、それ以後再び組合をつくることはむずかしくなるというのもわかっていたので、いろいろ相談の結果、どうしても組合をつくるなら、給与委員会を母体にして全学的なものにしなければだめだという結論になった。それに事前に組合結成の話がもれれば、さまざまな妨害があり結成までこぎつけられないだろうということも推測された。そこで慎重にも慎重を期し、また学内のさまざまな状況をも考慮して、組合結成準備委員は小人数にしぼることにした。文学部、経済学部、経営学部、外国語部、短大から９名の委員を選び準備委員会をつくった。外国語部からは吾妻先生と私が出た。半年をこえる準備期間をへて、ついに組合結成に成功した。教職員組合の結成が、大学の民主化とそれに伴っての社会的な大学の評価を高めることに大きく貢献したのは間違いないだろうが、それ以後のことについては、いろいろな人がいろいろなところで触れており、よく知られていると思うので、ここでは省きたい。

要するに吾妻先生が学内の民主化のために果たした功績を記したかったのである。刷新委員会委員、全学教授会委員、外国語部長、組合結成準備委員・・・若い吾妻先生は実に溌剌として頼もしかった。的確な判断力、説得力のある弁舌、危なげない行動力、どれをとっても右に出るものはいないように思えた。

その後、吾妻先生は当局から学生部長に抜擢され、私たちとは少しちがう道を歩きはじめた。また吹奏楽部やサッカー部の責任者として活躍されたことも、多くの人の知るところであろう。

吾妻先生は、いつもはっきりと物を言う人であった。それから、その後たしかに私なども、寄付行為改正問題その他で時として教授会等で意見を異にし、対立するようなこともあったが、しかしそのことで個人的な人間関係がこわれるようなことはなかった。それも、やはり吾妻先生の懐の深さ、人間的な度量の大きさだったと思う。

退職を前に学内で行われた送別会に160人もの教職員が出席されたのは、大学でもかつてない希有な出来事であったろうが、とくに職員の人たちの出席が多かったことは、いかにも吾妻先生らしい学内での広範囲な人間関係を示す証左であったと言えよう。

定年退職されて、今後は在野で悠々自適の生活を送られるであろうが、奥様ともどもいつまでもお元気で過ごされるようお祈りし、また長い間のご交誼に感謝して、この送別のための拙い稿を閉じたいと思う。

吾妻雄次郎先生

佐　藤　玖美子

竹下先生、細川先生、中村先生、山縣先生が既に退職され、そして今度は吾妻先生、と、ついに駒沢大学外国語部の“古き良き時代”も幕が降りた感じがする。

第１研究館が完成してからこれまで、吾妻先生とは研究室がお隣同士、時々吾妻先生が部屋を間違えて私の部屋のドアをぱっと開けられたり、また勿論逆のこともよくあった。お隣で、しかも出講曜日が似ていて、先生とは部屋の入

り口で顔を合わせる機会が多かったが、そのたびに廊下で結構長話をさせて頂いたものだ。話し好きで、話題豊富な先生との会話はとても楽しく、また私にとって有益なお話も多かった。先生とは、スペイン語の専任教員数の増加のことで衝突したこともあったが、会議室を出れば、何事もなかったように談笑できたことは、やはり吾妻先生のご人徳だったと思う。

吾妻先生は、六階の研究室への上り下りをいつも階段を使っておられた。私の方は階段はもっぱら下りだけだが、上がってこられる吾妻先生とよく擦れ違った。もうあのエネルギッシュな若々しいお姿も見られなくなったと思うと、寂しさがこみあげて来る。吾妻先生には、本当に駒沢大学のために、もっともっと活躍して頂きたかったと思う。

これからも、ますますお若く、素晴らしい第２の人生を謳歌されることを願ってやまない。

吾妻先生へ

杉　山　秀　子

吾妻先生、30数年に及ぶ御勤務お疲れ様でした。長い学部長としての御勤務と学生部長などの大役を次々とこなし、駒澤大学の近代化に貢献されました。また駒澤大学の教職員組合の設立の発起人のうちの主要メンバーであり、組合創設のために奮闘されたことは後世にまで銘記されることがらでありましょう(但し、組合がちゃんと存続していればの話ですが…。)。先生のすぐれた頭脳や、合理的な思考方法などが大学発展のうえで十分生かされなかったことは残念に思われます。先生御退職間際の外国語部の教授会もノーマルなものではなかったので、さぞかし御心残りであったろうと御推察いたします。できれば、もう少し、長老としてバッシリ発言をしてくださり、外国語部をまとめていた

だきたかったと残念に思えます。御遠慮なさっていらしたのか、あるいはあきれ果てていらしたのか、最後は腰がひけていたかのように思われました。

とまれ長いあいだのお疲れを十分に癒し更なる新しい御生活の御成功を心よりお祈り申しあげます。